

イネづくりも日進月歩

指導部顧問 松浦 一字

旧態依然では

生き残れない

宇宙ステーションに長期滞在して無重力等、地球と環境がまったく違った所で様々な研究が進められている。

子供時代に見た手塚治氏著「空想マンガ」の世界が夢物語ではなくなった。近代科学技術の進歩には驚き、感嘆するばかりである。稲作技術に於いても、筆者が就農した1962年(昭和37年)頃の農業では想像もつかない程の進化である。

大区画圃場と施肥体系

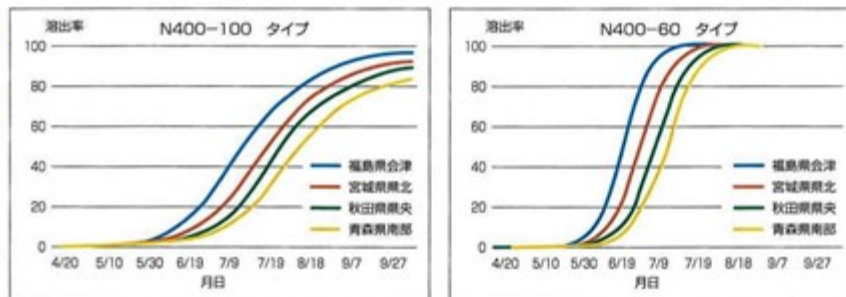
り、頑なにこれまでの技術に「溺れ」頑なに「守ろう」としても取り残されかねない。

時代経過と共に変化する環境に迅速に対応、技術改革して行くことが重要である。

巾60m、長さ200m一枚の大区画圃場も普通に見られる。基肥散布はグラウンドソーやプロードキャスター等で簡単に施肥出来るが、つなぎ肥、穂肥の散布は困難を極めることから、水と一緒に流し込む方法等が普及されてきた。

また、苗箱に播種と同時に本田基肥も施用できる肥料(商品名・苗箱まかせ)やロング肥料などの水稲一

肥効



東北地方の相対的に気温が低い地域や肥沃度の低い圃場では溶出期間の短い60日タイプが、相対的に気温が高い地域には100日タイプが適します。

図1. “苗箱まかせ”育苗箱本田全量施肥体系肥効(メーカーカタログより)

発肥料は、省力しながらも肥効が調節できる施肥方法が普及しつつある。

コスト的には若干高価になるようであるが、稲長の伸びにくい品種「はえぬき」や「つや姫」の場合は有機50%の専用のロング肥料も開発されている。

特に、砂壤土等の地力に欠ける圃場では従来の施肥体系よりも増

収、品質向上に繋がっている事例も多いようである。

尚、図1は「苗箱まかせ」タイプ別に肥効を表したものである。

また、図2は、基肥一発肥料の肥効をイメージしたものである。実際には、その年の気温の経過で肥効の出方に若干の差はあるがイネの生育を大きく狂わすほどではないように感じている。

留意したい事柄として、品種ごとの適量を守ること。また、やや少な目にして不足に感じられた場

合は流し込み(写真1)等で追肥することが健全イネづくりに繋がると思っている。

また、30a区画であっても、大区画経営(20~30ha)となると一枚ごと動力散布機で適期に適量の穂肥を従来通りに実施したくとも適期に回りきれなかったり、忙し過ぎて体調をこわしかねないので必然的に、前述した施肥体系(開発が進む基肥一発肥料や流し込み肥料等)も徐々に普及しつつあるように思っている所である。

一朝一夕には出来ない土づくり

前述したように、堆肥や豚尿等の投入による土づくりやヨウリン、ケイカル等(土づくり資材)の投入による健全多収イネづくりが基本である。

写真2にある通り、土づくりを実践して来て痛感させられるのは、理想的な地力は一朝一夕には出来ないと言ふことである。正に。継続は力なり。低米価で簡単ではないが、少量でも積み重ねることが大切である。

被覆尿素肥効イメージ ※実際の肥効とは異なります。

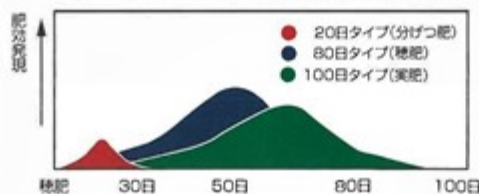


図2. 基肥一発肥料肥効イメージ(メーカーカタログより)



写真1. 流し込み施肥実施中 (サンアグロ株式会社より)



写真2. 土づくり資材を散布中の筆者